

浄土

1
1994

新年特大号

〔新連載〕現代の快僧・古宇田亮順さん



法然上人鑽仰会発行

心 行きかう道標。



優しい気持ちに戻って、

大切な人と

話したい時間がある。

人と人との思いやり、

心をこめてかわす会話。

毎日の暮らしの中の道標。

0088はあなたにとって

そんな存在になりたいと

考えています。

ますますおトクになりました。

0088はご加入にかかる費用も、基本料金も無料です。

お申し込み・お問い合わせは、日本テレコムお客様センターへ

フリー
コール **0088-82(無料)**

または

 **0120-0088-82(無料)**

● 受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

日本を楽しくする電話

0088

伊豆を往く

写真 夏攸吾

河津七滝の主「大滝」

河津七滝「釜池」



河津七滝「蛇滝」



河津七滝「出合滝」



河津七滝「えび滝」



河津七滝「初景滝」と「伊豆の踊り子」像



河津七滝「かに滝」



わさび田



稲田

「大滝」落ち口から、下は大滝温泉「滝見」の露天風呂





(上) 清流に“モジリ”を仕掛ける
 (中) 鉄を構える河津川のズガニ
 (左) 朱赤に茹であがったズガニ

浄土

1994/新年号



目次

[カラー口絵]伊豆を往く……………写真=夏 攸吾	3
親の心・師のころ……………藤堂恭俊	8
——法然上人をめぐる——	
伊豆を往く——天城のめぐみ譚——……………夏 攸吾	20
念仏信仰の系譜——(最終回)……………須藤隆仙	28
午後の日差しの中で——〔新連載〕	
めぐり会い……………吉川英明	34
テレビキャスターのアンクル——⑤	
視聴率という怪物……………利根川 裕	42
現代の快僧——〔新連載〕	
下町のデイズニー 浄土宗 西光寺住職 古宇田亮順さん……………稲葉小太郎	48
[書評]『いのちを看取る』……………	60
生きる……………僧 多聞	61
編集後記……………	68

表紙題字=総本山知恩院門主 中村康隆親下

表紙撮影=落合泰三

目次カット=田村直巳

親の心・師のこころ

法然上人をめぐつて

藤堂恭俊



書院の庭に、白や濃淡それぞれピンクに染めた山茶花や、椿の花がちらほら緑の木立ちにくつきり色を添え始めた。何気なく朝刊を開くと、見開き一杯に有名私立大学の来年度の入試案内を掲載しているのを目がとまる。

今年の三月、四十数年の長きにわたって奉職

していた佛教大学を退職したばかりであるのに、もうそのような入試の季節が到来したのかと、まるで他人事のように思う自分自身に気づいて、一驚させられた。

大学受験のために今年こそはと、最後の追い

こみに懸命の努力を払っているわが子と、神経をいらだたせないように一家一族あげて気配りしながら、期待と不安に胸をさわがせている親心のぬくもりに、おもいをかよわさずにはいられない。わが子に注がれる親の愛は、いつの時代も変わりがない。

法然上人（一一三三―一二二二）も人の子であつた。特に、両親そろつて神仏に祈りをこめていただいた子であつたから、愛情のぬくもりに一身を包みこまれながら成長されたが、父上の漆間時国公は夜討ちにあつて、あえなく不慮の死をとげられた。ときは保延七年（一二四一）春のころ、上人九歳の時のことである。

父上はこの時、深い傷を全身に受けたが、その痛みをこらえながら、遺してゆく妻子一族に向かつて、息も絶えだえのなかから、

われはこの傷にてむなしく、みまかりな

んとす。敵人をうらむる事なかれ。これ前世のむくい也。なお報答をおもうならば、転展無窮にして世々生々に戦い、在々処々に争うて輪廻たゆる事なかるべし。

おゝよそ生あるものは皆、死をいたむ事かぎりなし。われこの傷をいたむ、人また痛まざらんや。われこのいのちを惜しむ。人豈にをしまざらんや。わが身にかへて人のおもいを知るべき也。

はやく俗をのがれ、私の菩提をとぶらい、みずからも解脱を求むべき也。

と言ひ遺したという。この遺文をひらたく綴り直すと、次のようである。

私はこのように深い傷を受けたので、まもなく死んでゆかねばならない。だからといって、決して仇敵を怨んではならないよ。私がこのようになったのは、もとを尋ねる

と因果応報、自業自得というほかないのだ。仇敵に対して仇討ちをするならば、仮りに成功したとしても、相手方の子はお前に仇討ちをしかけるであろう。そのように戦いは戦いを呼び、争いは争いを誘って、つき果てることがない。この事をよくよく心得なさい。これがこの世の定めである。

生きものはおしなべて、死をことのほか嘆き悲しむ。私は深い傷の痛みに堪えられない。たとえ私のいのちをねらった仇敵であつても、このような深い傷を受ければ、きつと痛みに悶えることであろう。私は愛しい自分のいのちが絶たれることを惜しむても余りがある。たとえ仇敵であらうと、愛しい自分のいのちが絶たれることを惜しまないはずがない。私が身をもつて経験したこのことを、仇敵の上に移してみると、経

験したくないと思うに相違ない。この経験は私ひとりだけでなく、仇敵の上にも及ばないように是非したい。

それにつけても、生と死、怨と親に対するとらわれ心を排除し、私の菩提を祈り、お前も自分自身の執着心を除くべく仏門に入り、自他ともに、怨親ともども平等に救われる道に進んでくれ。

このように上人の父上の遺言は、自他一体感を基調とする怨親を超えた深い愛情からわき出たことばとして注目させられる。

今日の社会は、大変便利であり、快適でスピーディーな生活を送ることができるが、裏を返せば交通事故死、凶器使用による死亡など枚挙に暇のないほど、不慮の死が続出している。まさに現代は「人を死に追い遣る」一面を備えてい

る、と思われてならない。さらに目を世界に転じてみても、冷戦の時代ひらかれたというものの、民族・思想の対立に基づいて、銃砲による死者が多発していると伝えられている。いずれにしても、不慮の死をとげられた方がたのご冥福、さらにご遺族の皆様がたの悲痛な心が少しでも和らぐように、お念仏を手向けずにはいられない。

これら不慮の死によって不帰の人となられた人は、愛しいわが子を始め一族の人たちに、何一つとして言葉を遺さないまま世を去られたことであろう。遺されたご遺族の心境は、そのような経験のない私が察する以上の深い痛みに包まれていると思われる。だから、「いったん死んだ人は帰ってこないのだから、あきらめなさい」といっても、到底あきらめ切れずに、「なぜ私の父が、私の夫が、事故にあわねばならなかつ

たのか」、「相手の人がルールを守り、安全に気を配っていれば、このような悲痛な思いをしなくてすんだのに」と、思えば思うほどに怨みの炎に心を燃やすことになる。「父を返せ、夫を返せ」と訴えることもある。時間の経過とともにあきらめることがあっても、怨み心は消えることなく、心の奥深くにひっそり鎮座することであろう。仮りに遺言をいとおしいわが子に遺す父親があっても、果たして上人の父上のような自他一体感に立つ内容を語り得る人は、いったい何人あるであろうか。名聞と利養に明け暮れて、彼岸の世界への思慕を怠った人と、上人の父上とをどうして同視することかてきょうか。わずか九歳の上人は、父上の遺言を容易に理解したとは思わないが、それでも、劇的な父上の最後の様子とともに、耳底に焼きついた父上の音声、ことばは、わからないまま父上の命令

となつて、上人の心の上に息づき続けた。

幼稚のむかしより成人の今にいたるまで、

父の遺言わすれがたくして

と、述懐しているように、年とともに成長する上人の歩むべき方向を決定づけている。思えば上人は幼にして、本ものの声を聞かされ、それに触れ、肌をとおして体のすみずみにまで浸透した父上の遺言が、ありきたりの山僧に終わらしめなかつたのである。これは誠に恐ろしいことであつて、怨親を越えてともに生きるということ、次元の高い、彼岸の心を授けられたればこそ、世俗の世界に転落もせず、阿弥陀仏の一人も漏らさないという平等の心を、この世に顕彰し得たのである。

上人は弱冠九歳にして、父上の非業に遭遇するという不幸を経験されたが、その否定的な心情を足場として、その不幸を精神的な浄福に昇

華せしめたのは、いうまでもない父の遺言であつた。くだいようであるが、仮りに父上が怨み骨髓に徹する仇敵を討ちとれ、と遺言されていたならば、どうなつたであらうか。曾我兄弟が亡父の仇討ちを果たした半世紀以前のことであるから、幼い上人が遺言を心にとどめ、時のいたるのを待つて、遺言どおり仇討ちを決行される可能性はないではない。だとすると、阿弥陀仏の救いのみ心は何時、誰によつて示されることになつたであらうか。一人が怨親の俗情を越え、めざめた発言をすることが、いかに大きな影響をもたらすかを如実に示したのが、父上の遺言である。

大学を受験する近ごろの青年は何を目標とし、何を基準として、希望の大学を選んでいるのであらうか。私たち古い時代は、自分が専攻した

い学問の領域で、最も權威のある学匠のいられる大学を選び、その研究室に入ることを望んだ。今と比べると、大学の数、受験生の数も少なかったから、そうしたことができたのであろうと、往時を回想して誠に佳き時代であったと喜ぶのは、私独りであらうか。念願がかなって敬慕する師のもとで、薰陶を受けた誇りと、学恩に対する感謝の思いは枯れることがない。

法然上人が父上の亡きあと、那岐山の中腹菩提寺の観覚のもとに弟子入りしたのは、母上の弟にあたるという血縁関係と、父上の遺言とが重なったことであった。幼い甥に仏教の手ほどきをして年を重ねる内に、「ただ人にはあらずおぼえければ、いたづらに辺鄙の塵に混ぜん事ををし」む心にかられた師の観覚は、かつての旧友、比叡山西塔北谷に住む持宝房源光のもとに送りこむことを決意した。上人はこれを甘

受することく「父の遺言、耳の底にとどまりて、心のうちにわすれ」られなかったので、悲歎にくれる母上を再三説き伏せて登嶺した。逸材を秘蔵しないで仏教の一大学府比叡山に送った観覚の心、いとしい一子を涙ながらに遠隔の地に送りだした母親の心は実に尊く、美しく思われる。

髪長の童形のまま登嶺した十三歳の法然上人を迎えた源光は、ほどなく「われこれ魯鈍の浅才なり。碩学につけて同宗の奥義をきはめしめむ」といって、その名声一山にとどろく明匠、東塔功德院肥後の阿闍梨皇円のもとに上人を送りこんだ。十五歳のとき一乗戒壇院で戒を受け、文字どおり出家の身となった上人は、天台知者大師の著、『天台三大部』と湛然の註釈書あわせて六十巻を、比叡山という大自然に囲まれ、靈氣のただよう山道を昇り降り往来しながら、三箇

所において皇円などの三師について、三年間に

わたつて受講した。師の皇円はさらに続いて研鑽すべきを促したが、上人は聞き入れずに西塔黒谷に移り、慈眼房叡空の膝下に身を寄せた。

一代の学匠の引きとめにも拘らず、黒谷に移られたのはほかでもない、上人の、

学問は始めて満たつるは、きはめて大事なり。師の説を伝習はやすきなり

という、学問に対する姿勢がそうさせたのである。つまり、ものの根源を尋ね、極めるのが学問の本領であるから、いくら伝統的な考えてあつても、ただ、師説を受けつぐだけでは、学問の本筋からはずれている、というのが上人のお考えである。上人は自分も他人も一律平等に生かされる真実の道を尋ね、それをわが身とわが心の内に極め備えることであると心得られた。

そのことはまた、自他一体感に根ざした父上の

遺言の心でもあった。

師の叡空は十八歳の法然上人を迎え、雛僧の来意にいたく感動し、讃意を表して、法然房源空という房号と諱^{いみな}を授けた。叡空は大乗円頓戒の正嫡を誇る天下の戒師であり、実に厳しい人柄であつた。上人はその膝下にあつて「大藏経」をくまなく繙き、経説を實地に実践して体得することに努めた。厳しい修行を重ねれば重ねるほどに、自分は戒定慧の三学をまどかに備えることのできない人間であると自覚するに至つた。つまり自分は生死を離れる仏道を歩むことができない、という悲愴な自覚であつた。しかし上人は、自分のような三学非器者が生死を離れる道は、仏法中に必ず用意されていると確信し、「大藏経」に探り、多くの師に尋ねる日を重ねられた。

このように悶々の日を重ね、「昨日もいたづ

らに暮れぬ。今日も又むなしくあけぬ。いまいくたびか暮らし、いくたびかあかさんとする」と述懐した最中、たまたま師の叡空と円頓戒の戒体をめぐって、はげしい論戦を展開した。ときに師はつのる感情を押さえきれず、ついに「木枕をもつてうたれ」たので、上人は問答無用とばかりに自室に戻られた。しばらくしてのち師の叡空は上人の部屋を訪ねて、「御房の申さるむねは、はや天台大師の本意、一実円戒の至極」であるといつて、弟子の考えを認め、自説の非を詫びた。弟子に対して尊大な構えをすることは容易であるが、自説の非を反省し、あまつさえ弟子を訪ねて詫びたという師の学問に対する姿勢は、誠にあつぱれであり、このような学問に生きたお方を師となし得た上人は、何と幸せなことであつたであらうか。

また、往生浄土の行について、観仏と称名と

どちらが勝れているかをめぐって、師との間に論難往復することがあつた。この時も自説を固執して一步も引くことのなかった師の叡空は、最後の切り札とばかりに「先師良忍上人も、観仏すぐれたりところおほせられ」と応酬した。ときに上人は、「良忍上人もさきにこそ生まれ給たれ」、つまり学問はただ師説を伝習、継承するだけでは通用いたしませんと、臆することなく言いきつたという。学問に生きた師の叡空との論戦であればこそ、弟子である上人が堂々と言い得たのである。

怨親の俗情を越え、めざめた発言を遺言として語り得た時国公を父上とし、さらに学問に生きた叡空上人を師と仰ぐことのできた法然上人は、誠に幸せなお方であつた。

(大本山増上寺法主)

年 新 賀 謹

總本山 知恩院

門主 中村康隆

大本山 増上寺

法主 藤堂恭俊

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林靈法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 光明寺

法主 戸松啓真

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170
東京都豊島区西巣鴨三二〇一

大正大学

電話〇三三九一八七三二一代表

〒603
京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話〇七五四九一一二四一代表
通信教育部 四九一一〇三三九

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳短期大学

理事長
学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五十五一七

埼玉工業大学

松川文豪

平成六年 元旦

年 新 賀 謹

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四一七一九

大吉寺

教安寺住職

浄土宗宗議会議員

野呂幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六二一

お寺はみなさんの相談所
浄心寺

小池政雄

〒113 文京区向丘二一十七四

鎮西学園理事長
鎮西高等学校校長
真和中・高等学校校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺二一八一
電話(〇九六)三六四一八一七六代

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇安国寺
慈光ビル(〇二七)二二二三四〇〇〇

函館稱名寺住職

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八一四

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

〒709 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話(〇八六七)八一二二〇二

龍泉寺住職

伊東康雄

〒107 東京都港区南青山二一八二五

浄土宗宗議会議員

斉藤价洲

〒110 東京都台東区東上野五一一六
宗源寺

淑徳高校名誉校長
保元寺住職

里見達人

〒111 東京都台東区橋場一一四一七

雲上寺住職

東海林良雲

〒985 塩釜市南町一一一

中島真成

青山梅窓院

〒107 東京都港区南青山二二六二三八

平成六年 元旦

謹 賀 新 年

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四―二二八
電話 (〇四六七)二一〇七〇三
FAX (〇四六七)二二一五〇五一

神奈川県南足柄市沼田三一五

西念寺

北邨謙順

〒五〇一〇一 電 〇四六五四四〇五八八

〒112 東京都文京区小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話東京三八一四局三七〇一番(代表)
振替東京六〇九三番

光明寺

白幡憲佑

〒232 横浜市南区庚台六六(久保山)

松庵寺内無為窟主

小川金英

〒025 花巻市双葉町六一四
仏教福祉センターによるひる銀行

お骨仏の寺 一心寺

貫主 高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九
電話(〇六)七七一―〇四四四(代)

晴雲寺

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五

大松寺

酒井亮貫

〒108 東京都港区三田四―一―三八
電話(〇三)四五一一二四九四

愚鈍院

中村眞道

〒980 仙台市若林区新寺三―二―一七
電話(〇二)二五六六〇五七

天光院住職

真野龍海

〒105 港区芝公園一―三―十六

願行寺住職

佐藤成順

〒140 品川区南品川二―一―十二

光専寺住職

服部亮馴

〒180 武蔵野市吉祥寺本町一―十二

平成六年 元旦

謹

賀

新

年

九品仏浄真寺

清水順碩

〒158 東京都世田谷区奥沢七―四―三

光円寺住職

佐藤良純

〒112 文京区小石川四―十二―八

光取寺住職

大室了皓

〒141 品川区上大崎一―五―十三

貞松院住職

山田和雄

〒392 諏訪市諏訪二―一六―二二

明顕山 祐 天 寺

住 職 本多正雄

副住職 巖谷勝正

〒153 東京都目黒区中目黒五―二四―五三
電話(〇三)三七二二―〇八一九

浄土宗宗議会議員

圓光寺住職

加藤順底

〒620 盛岡市南大通三―一―四九

横浜大光院

宮林昭彦

西光寺住職

樋口隆信

〒986 石巻市門脇町二―一五―七

十念寺住職

袖山栄真

〒380 長野市西後町一五六八

西福寺住職

宮沢正順

〒243 厚木市妻井東三―三八―二六

浄土宗東京教区青年会

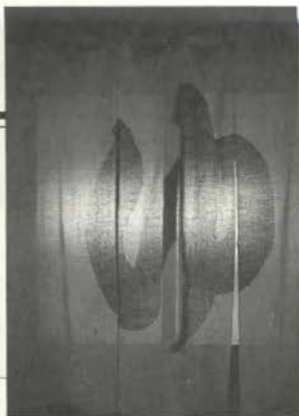
〒105 港区芝公園四―七―四

明照会館内

法然上人鑽仰会会長
念佛寺住職

牧田諦亮

平成六年 元旦



伊豆を往く

天城のめぐみ譚

文と写真 夏 攸吾

湯ヶ野のズガニ風前のともしび

小さな食料資源のはなしをひとつ、
しようと思う。

昨年わが国の稔りの秋は、何十年ぶりかという米の凶作に見舞われ、青息吐息の有様だったが、そんな大問題ではなくても、至るところに食料資源を大事にしない、真面目に考えない悪い癖が潜む。繁栄だけはみつともない、自戒も込めてそう思う……。

久し振りの伊豆だった。前にも言ったとおり私はへそ曲がり、衆目の集まるところには背を向けたくなる。いうまでもなく伊豆は、超一級の観光地。マスコミに取り上げられる頻度も高いので、自然と足が遠のいていた。

このたび、めざしたのは湯ヶ野。修善寺から湯ヶ島とおって天城越え、と言えばご存じ『伊豆の踊り子』ルート。当時の旧道に代わって新道のトンネルが通じ、ループ橋がマイカードライバ



国道414号の七滝ループ橋

「私たちの話題をさらってから、だってもうずいぶん時がたつのに、やっぱりいまだに「踊り子」なんて、私なんかちよつと恥ずかしいくらい気分である。

峠を越えると、天城山系から流れ下る河津川に出合う。この川で捕れるズガニに逢いに、しかも「すっかり捕れなくなつて、ピンチだ」と聞いて、やってきた。

訪ねたのは、湯ヶ野より少し上流、七滝^{ななたき}民宿「てつぼう」稲葉さんのお宅。

主に食をテーマに催すナント力祭りの企画は、どこでも誘客作戦の常道。ここ河津町の民宿でも、「ずがにまつり」は伊勢えびまつりや猪鍋まつりと

並ぶ冬の名物だった。それが資源の枯渴か、近年パツタリ捕れなくなり、他所から仕入れるなどしても、今年はいつでも用意できるところは、わずかに二軒とか。「てつぼう」でも三年前から、ずがにまつり参加をとりやめ、「捕れた時に食べてもらう」ことにしたという。そういうところへあえて「ズガニをなんとか」、無理なお願ひは意地悪なようだが、稲葉さんにズガニの話をききたいわけがあった。

「てつぼう」は、いまからおよそ百三十年も前の江戸時代末期、文久年間から明治まで鉄砲鍛冶^{なぐわい}を生業としてきた旧家。現在の主はかつて町役場に務めて観光立町に携わり、昭和三十九年に

湯ヶ野七滝民宿「てっばう」



率先して民宿を開業した人である。誰よりもよく地元の事情に通じている。

冬の陽が天城の山に傾きかけるころ、稲葉さんがズガニ捕りの準備を始める。仕掛けはモジリといって、入ったら逃げ出せないように「返し」をつけた長

方形の網籠、中に誘い餌の魚のあら、など入れて川の流れに沈める。昔は鰻捕りの釜（せん）のように竹で編んだものだったそう。白壁に熟し柿の影が濃い。稲葉さんによれば、蟹の体力がもつとも充実するちょうどこの時期が旬、産卵のため海に下るころを狙うのだという。

モジリを携えすぐ下の河津川へ、清流の水が冷たい。「入りますかね」と問う私に、稲葉さんは「まあ期待はできませんね、捕りすぎたですよ」と、気がすまない様子だ。

露天の温泉に手足をのばし、野菜はすべて自家作りというところづくしの夕食。旅なれてきた客を相手に、いまはもはや民宿も片手間にできるもので



「モジリッ」を手につく
「ぼう」の稲葉さん（左）
開いた姿勢で身がまえる
ズガニ（下）



はなくなつた……。

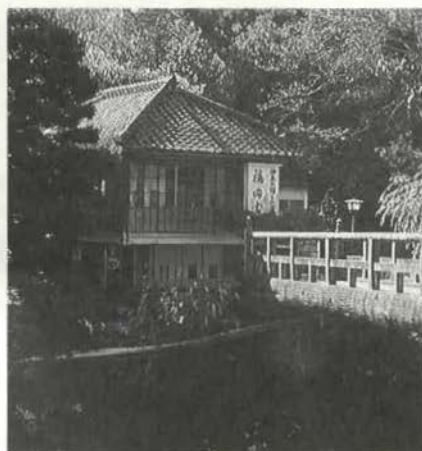
誘われて出かけた近くのスナック酒場、ここにもズガニ料理の看板。稲葉

さんが、茹で蟹とズガニ汁を注文する。
ズガニ汁というのは、生きた蟹を出刃でさばき、ミキサーにかけ、漉しとつたエキスで作る味噌汁。残酷、と思われるかもしれないが、茹で蟹にしたって生きたまま、五衛門焚きにしないやバラバラに脚がもげて商品にならないし、旨くもない。ようするに私ら人間どうあがいたって、他の生き物を殺生して生きるしかない、残酷で罪深い生命なのだ、せめて無駄なく食べることが罪滅ぼしなのである。

ところで、ズガニ汁はこくのある旨味を味あわせたが、茹で蟹のほうはパサパサに痩せた身に天与の恵みなく、バツ。どこから仕入れたのか明らかな



天城名産の生わさび(右)
「伊豆の踊り子」の宿、
湯ヶ野温泉福田家



冷凍もの、これでは河津川のズガニが
浮かばれない。

気を取り直すように、稲葉さんが童
顔に返って話してくれた昔語り。夜陰
に乗じて川を漁れば、魚でも蟹でもい
くらでも捕れたし、モジリにしても、
いいときには一籠に十五も二十も入っ

た、という。

それが、高度経済成長の消費社会に
なって、一気に衰退に向かう。売れる
とわかったズガニは寄ってたかつて捕
りまくられ、川魚もめっきり少なくな
った。このあたりは清水がなくてはな
らない有名な山葵^{わさび}の産地でもあるが、
しかし、見た目には変わらない清流に
も、かつてほどの生命力はない、とい
うことになる。疲れてしまっているの
だった。

資源の減少が深刻になってから、漁
協ではズガニの放流を始めたが、効果
は薄いという。稲葉さんは、「ズガニは
雑食でなんでも食べるし、強そうだけ
ど、川にもそれぞれ個性があるから……



よそからヒョイと持ってきたって、そう簡単には棲みつけないでしょ」と、真顔に戻っていった。

抗議の鉄ふりがぎすズガニ

正直、私はこの時点ですでに空振りを覚悟したが、翌朝モジリを引き上げ

て見ると、予想どおりの坊主^ベ。しかし、気配りの稲葉さんはぬかりなく、親戚に声をかけて捕れたズガニを三匹、調達してくれていた。私はそれで滅多にない、つくりの写真、モジリに入ったズガニの構図、を撮った。

ズガニは地方名で、一般にはモクスガニという。各地の川や河口域、磯にも見られ、左右の大きな鉄にマフのような柔らかい毛を密生させているのが特徴。カメラを向けると果敢に挑みかかる姿勢を見せ、「気をつけてくださいよ、鉄まれたら指くらい引きちぎる力がありますから」と、稲葉さんから声がかかった。その振りかざす鉄が私には乱獲抗議の拳のように見え、ちな

曾我兄弟ゆかりの河津八幡神社



みにズガニの甲羅の大きさ、ちようど拳くらいであった……。

「戻るころまでには茹でておきましよう」と送り出されて、散歩に。冬も日向ぼっこが愉しみ、といわれるくらい山里のどかなこのあたり、河津七滝めぐりをはじめ、天城の自然に親しむハイキングコースがいろいろ整備されている。二日酔ぎみの私は軽く、湯ヶ野温泉まで。刈り入れの田圃では「おかげさまで平年作でした」と、農家のお母さんがホッと頭をさげ、一方、ズガニのふるさと河津川は、至るところで護岸や流路改修の工事が進み、また川端康成が『伊豆の踊り子』を執筆した湯ヶ野の福田家あたりは、どこにでもある

石畳の平凡な景観に変わっていた……。

一汗かいて戻った「てっぼう」の緑側には、ほんものの河津川のズガニ、みごとな朱赤に茹であがって待っており、私は人の身勝手さを片手拝みに詫びてから、ありがたくいただく。甲羅をはずしてミソを舐め、でか鉄を園芸鋏で切り割って身をすすする……と、海蟹の蟹とは一味違った、爽やかな甘さの旨味が口中に広がった。「昔は暇をみてモジリを仕掛けて、茹で蟹は子供たちのおやつでした」と、稲葉さんがいう。そんな捕り方である限りは、資源の枯渇する心配もなかったわけだ。

きれいに食べて、私が思うにこのズガニ、まさしくおやつ、仕事休みのビ

峰温泉の踊り子温泉会館



ールに似合い、決して派手に売りだすものでも、とびついて食らうものでもない、ということだった。

あるがままに、なければ我慢、することを忘れた人間は、末恐ろしい。



帰途、天然記念物の大楠が茂る来宮神社、曾我兄弟の父、河津三郎ゆかりの河津八幡神社など観て歩く間も、私はやがて幻になるかもしれないズガニの味をかみしめていた。

付記すれば、峰温泉には日帰り入浴休憩の「踊り子温泉会館」。名前はいただけないが、設備には文句なく、なにより明るく親切に対応する若い受け付けの女子諸君が、実に気持ちいい。こういうところを知ってしまうと、ろくなサービスもなく高い銭をとる宿なんか、だれが泊まってやるもんか……と想う。概して日本の宿は高すぎる、旅人はもつと厳しい目でチェックすべきなのだ。

連載 ⑥

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

世親菩薩のお念仏

大乘仏教を発展させた人に、龍樹菩薩に次いで世親菩薩せしんというお方がおられます。紀元

五世紀頃の人で、梵名はバスバンドウ（婆藪槃豆などと音写）です。龍樹菩薩より二百年くらい後の人です。世親はバスバンドウを漢訳した名ですが、古い訳（旧訳）では天親てんしんと

しております。ですから天親菩薩とも申し上げるのです。この名について、古書に、両親が天王に祈って授かった児だから天親というとあり、また「世の人の親近する意に依りて世親というところ」とあります。やはり出生から常人でなかったことを示している名なのです。

世親菩薩（以下、菩薩と記す）は、北インドのガンダーラ国にバラモンの子として生を受けました。兄をアサンガ（漢訳名は無着むじやく）といいましたが、二人とも非常に聡明で、仏教に帰依し、大学僧となったのであります。

菩薩は初め小乗仏教の説を信奉し、その論文を多く著しました。ところが、兄の無着のほうは大乗仏教を信奉していたのであります。

特に困ったことは、菩薩は「大乗経は仏説でない」としてこれを攻撃していたのです。

これを憂えた無着師は、なんとかして弟（世親菩薩）を大乗仏教のほうに引き入れたいと考え、あるとき大芝居をうったのでした。どういう大芝居かというと、無着師は弟の世親菩薩のところへ人を遣わし、「自分は今大病にかかっているから、すぐに来るように」と伝えさせたのであります。驚いた菩薩が飛んで来てみると、無着師がいうには、「自分の病気は心の病気であって、それはお前が小乗仏教を信奉して大乗仏教を誹謗しているからだ」といい、「お前は大乗仏教誹謗の罪で地獄に落ちることが決まっており、それを心配するのあまり病気になっているのだ」という

のでした。

驚いた菩薩は、「それでは大乘の教えを聞くだけは聞いてみましょう」といったので、無着師は懇々とそれを説いたのでした。また、このとき、別の部屋で弟子に「大乘經典」を朗々と読誦させたとも伝えられております。

これで菩薩は、大乘の教えのすばらしさを知り、小乗仏教を捨てて大乘仏教に転向したというのであります。

それからは深く大乘仏教の深奥を究め、優れた著書を数多く著されたのであります。菩薩が書かれた著書は、小乗仏教に関するもの五百部、大乘仏教に関するもの五百部で、計千部もあつたと伝え、ために「千部の論主^{みんしゅ}」とも称されているのであります。

さて、この膨大な著述の中で、有名なものはといえますと、唯識^{ゆいしき}といって仏教心理学のようなものに関する論述が多いのですが、この菩薩は、実は深い阿弥陀仏信仰を拠り所としておられたことに注目させられるのであります。それは、『無量寿経優婆提舍願生偈^{うぱだいしやがんしょうげ}』というお書物を著されたことで、はつきりしているのであります。以下、それについて述べます。

右書の題名ですが、無量寿経とは、単に『淨土三部経』の中の『仏説無量寿経（略して大經）』だけをいうのではなく、無量寿仏（阿弥陀仏）のことを説いた經典という意味で、『仏説觀無量寿経（觀經）』『仏説阿弥陀経（小經）』をも含めた『淨土三部経』全体のことをいっ

ているのであります。優婆提舍とは梵語ウパデーシャの音写で、「論議」の意であり、願生は極樂浄土に生まれたいとの願いであり、偈は讃歌のことで、即ち「浄土三部経に関する論文の意味をもった浄土願生の歌」という意味であります。『浄土論』とか『往生論』とも略称されております。

内容は、初めに二十四行の偈（歌）を挙げ、次に、自ら散文でその偈を註釈しているのがありますが、その冒頭の偈が何と、

世尊我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命
したてまつり、安樂国に生ぜんと願ず

というのであります。尽十方無碍光如来とは、阿弥陀如来のことであります。そして、偈の最後は、

我れ論を作り偈を説く。願わくは弥陀仏
を見たてまつり、普く諸の衆生と共に安
樂国に往生せん

というのであります。何という素晴らしい告白でありましょうか。小乗・大乘にわたる大
学僧が、「世尊（釈尊のこと）我れ一心に」という第一人称をもって信仰を告白しておられる、これは実に大変なことであります。ために法然上人はこの書を、『浄土三部経』と共に、所依（拠り所となる）の論と指定されたのであります。

菩薩はさらに、どうして自分は阿弥陀仏のお浄土に生まれようと願うかといえば、そこは「衆生の願樂するところ一切よく満足すとの故にかの阿弥陀仏の国に生ぜんと願ず」

と仰せられ、また、「仏の本願力を観ずるに
遇うて空しく過ぐる者なし」といわれて、こ
れが浄土願生の理由だというのであります。

何という素晴らしい信仰告白でありましょ
うか。阿弥陀仏のお浄土では、人々の望むこ
とが全部かなえてもらえるのだといい、阿弥陀
仏のご本願のみ力に遇ったならば、空手で
通り過ぎるようなことは絶対になく、必ず大
変なご利益をいただくことができるのだとい
うわけであります。小乗仏教を究め、大乘仏
教を究められた大菩薩様が、こうおっしゃっ
ておられるのであります。菩薩は仏教の帰結
を阿弥陀信仰に求められたのでした。

また菩薩は、この書の中で、五念門とい
うことを教えられているのであります。どうい

うことかといいますと、浄土往生するための
五つの実践行であります。門は真理の道へ入
る門ということで、その五つとは、①礼拝門
(阿弥陀仏を礼拝する)、②讃歎門(阿弥陀仏
の名をほめ讃える)、③作願門(極樂へ往生し
たいと一心に願う)、④觀察門(極樂のありさ
まを觀察する)、⑤回向門(信行の徳一切を人
人に回し向け、共に往生を願う)などであ
ります。この結果往生すれば、五つの功徳を
得ることができるとして、それを五功徳門と
いいます。近門(仏様と近くなる)、大会衆門
(聖者の仲間に入れる)、宅門(真実界に住め
る)、屋門(法の悦びが味える)、園林遊戯地
門(迷界を自由に救済できる)、などの五功徳
であります。

以上のことを拝し上げますと、要するに世親菩薩様は、お念仏信仰について、「信の大切さ」と「行の大切さ」とを教えられたことがわかるのであります。浄土宗の教義のごく基本的なことを定めてくだされたといつてよいであらう。特に「我れ一心に」と仰せられたあの「一心」は重大であります。法然上人が「ただ一向に念仏すべし」（『一枚起請文』）と遺教されたあの一向専修・一心専念の実動は、世親菩薩によって現成されたといつても過言ではないと思うのであります。

菩薩から何十年か後に中国に曇鸞どんらんという高僧が出られ、右の『浄土論』の註釈書を著されますが、これがまた名著で、念仏の教えはここから大きく大きく発展していくのです。

なお『浄土論』で忘れられないことは、「一い法句ぽうくに入る」（入一法句）という言葉が出てくることとあります。一法句というのは「真理を表わした表現」ということで、即ち、お浄土のこととあります。それで浄土宗ではお塔婆の背面に「入一法句」と書くのであります。前稿の龍樹菩薩と、この世親菩薩とは、インドでお念仏を弘められた大切なお二方でありますが、龍樹菩薩の念仏信仰は世親菩薩によつてますます具体化されたといつてよいであります。

（以上、「念仏信仰の系譜」インド編を終わらせていただきます。ご高覧ありがとうございます）

（函館・稱名寺住職）

午後の日差しの中で

〈第一回〉

めぐり会い

吉川英明

午後の日差しの中で、郵便受けから摺み出した封筒の束は、いつものようにあらかたDMだった。

中味も見ずに捨てていくと、一通の白い封書だけが手の中に残った。裏を見ると、『蓮寶寺』というお寺の角印が押してある。

心当たりのないまま封を切り、思わず「オッ」



と声が出た。

便箋にクリップで留めてあった名刺に『小川有順』とあったからだ。そう、この『浄土』誌の編集長の小川さんである。

私が、小川さんと初めてお会いしたのは、もう二十年近く前、昭和四十九年のことだった。その年は、私の父英治の十三回忌にあたり、

私の初めての単行本『父吉川英治』を文化出版局から出していただいたのだが、小川さんは当時、その文化出版局の雑誌「ミセス」の編集部におられた。

拙著を読んだ小川さんは、

今度は、お父上のことから離れて、気ままに、思いついたことを書いてみませんか
と、私の随筆を翌年の新年号から一年間、「ミセス」に載せてくださったのだ。

初めての単行本と、初めての随筆連載……晴れがましくもあり、恐ろしくもあった当時の思いと、編集者で作家の小川さんは、お坊さんでもあったのだという記憶とが、名刺のお名前を見たたん、どっと身内に甦ったのだった。

手紙の用件は、「浄土」に何か書かないか

ということだった。

電話で打ち合わせ、四、五日後に青山でお会いした。

久しぶりに会う小川さんは、心持ち太めになられたかなという以外、全然変わられていなかった。お寺の御住職というにはまだ精悍すぎるジャーナリストの目が、昔のままに眼鏡の下で光っていた。

お互いの現況や、二、三の昔話のやり取りがあつて、小川さんが、

もう一人、編集を手伝ってもらっている男が、今来ます

と、紅茶のカップを口に運んだ時、遅くなりました

と、その人が駆け込んで来た。

その顔を見るなり、私は思わずあつと腰を浮かせた。港区芝公園の「最勝院」の御住職村田洋一さんだったからだ。

村田さんも、

いや、今日吉川さんに会うんだと聞いて、私も驚いていたんです。

と、目を丸くしながら席につく。

村田さんと知り合ったのは、一昨年の十月、有楽町のマリオンで開かれた英治生誕百年記念の展覧会の会場でのことだった。

会場に私を名指して訪ねて来られた村田さんは、名刺を出しながら、

昭和の初めごろ、お父様が、一時芝公園のお寺を借りて住んでいらしたことがありま

したね……あれは、どうも、うちの寺じゃないかと思うんです

と、のっけから言つてのけて、私を驚かせた。

というのも、私は数年前、講談社の編集者の金子益朗氏と二人で、その芝公園のお寺を探し歩いて、ついに探し当てられなかったという経験をしていたからである。

その時、村田さんは、まだ世界文化社で雑誌の編集をしておられたのだが、

まもなく会社を辞めて、寺のほうに専念することになります。いずれまた、詳しいことがわかりましたら御連絡します

と言つて帰つていかれた。

そして、去年の六月、

寺の日誌を調べていたら、やはり、お父様のお名前が見つかりました

と、やや興奮気味の声で電話をくださったのだ。早速お寺にお邪魔した。

最勝院は、地下鉄の芝公園駅のすぐ裏手にあった。

そこは、以前金子氏と探し歩いた区域である。だが、あの時は二人とも、立ちはだかるビルの威容に圧倒されて、村田さんには申しわけなくも、もうお寺は残っていないのかもしれないなどと勝手に思い込んで、諦めてしまったのだ。

本堂に上がって、日誌を見せていただいた。何冊もある分厚い日誌の、昭和十年の冊子に、

当時の御住職の几帳面な筆で、一行、

六月十八日、吉川英治氏転居

と、はつきりと記されている。

父が、この日に最勝院から出ていつているのだ。引越し先は赤坂表町、三年後に私の生まれた家だ。父の自筆年譜の昭和十年の項の記述にそうある。

その自筆年譜によると、芝公園に移ったのは昭和六年となっているから、四年もの間ここにいたわけだが、村田さんがいくら探しても、日誌には、父が移り住んで来た時の記述はないという。

うちも、そのころとは随分変わりましたね。私も古いことは知らないんですが……その、それがお父様の随筆に出てくる池だと思えます

村田さんは、お寺の昔の図面を出してきたり、

縁先に私を案内してあちこちを指差したり、何とか当時の情景を私の頭の中に復元させようと一生懸命だ。

多分、ここを書斎になさってたんだと思います……。『親鸞』は昭和七年の作品ですから、ここで書かれたんですね。『宮本武蔵』を書き出される直前まで、ここにいらしたことになります。

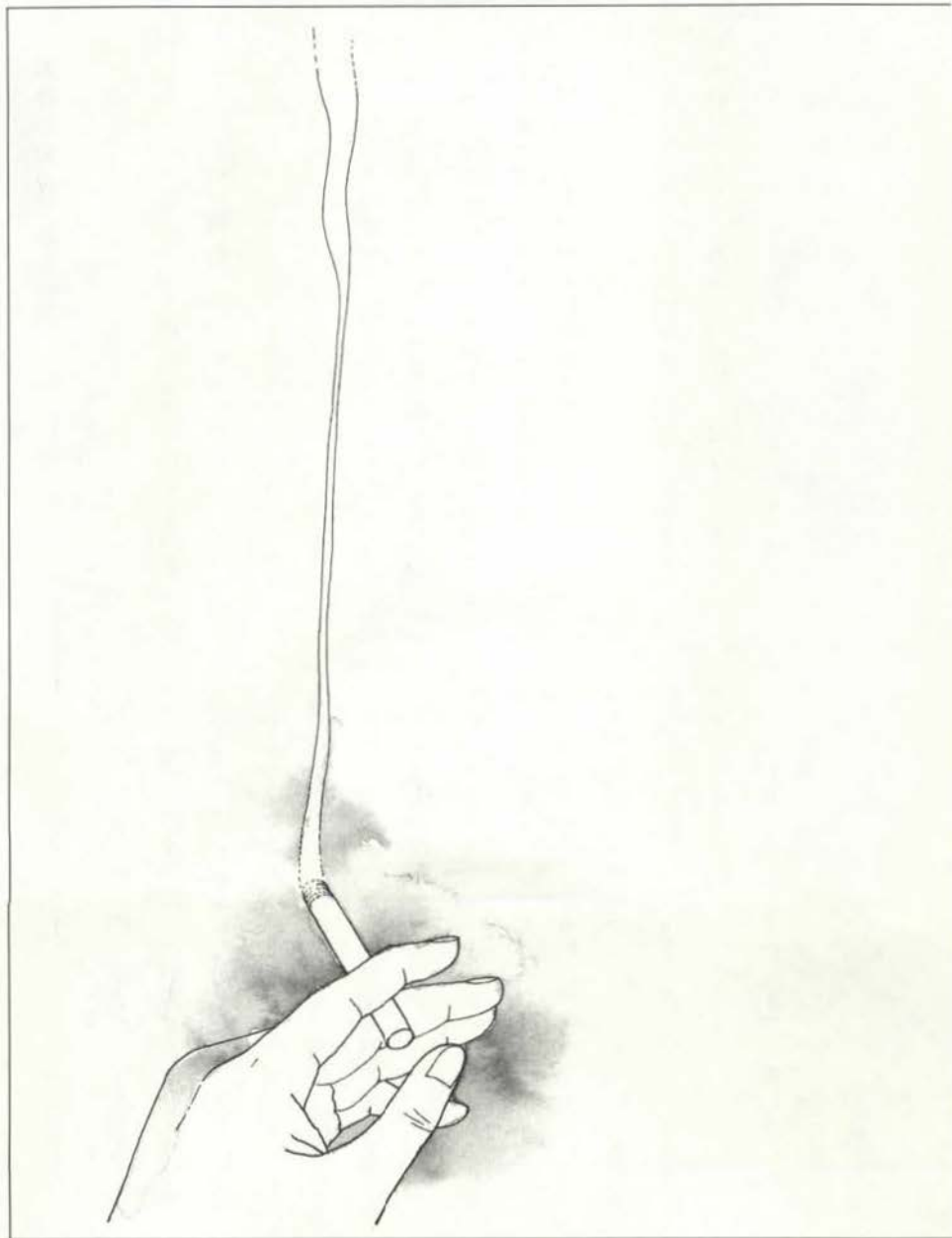
村田さんに指摘されて、その場に座っていると、やがて、自分もその昔ここにいたことがあるような、何とも言えない感慨が身を包んでくる。まだ全然整理ができていませんが、そのうち、もつと何か出てくるかもしれません。また、お報せします

村田さんの言葉を背中に、何か暖かいものに触れたような気持ちで、お寺を辞してきたのだ。つた。

その村田さんと小川さん……まったく別の機会に、別々の動機で知り合ったお二人と、喫茶店のテーブルを囲んでお話しているうち、私は、この邂逅に何とも不思議な縁を感じてきた。

小川さんとは、また別のところで間接的な関わりがあるというのだ。

私の父の墓は多磨霊園にあって、以前から、霊園の入り口脇の「近藤石材店」に墓の掃除などをお願いしているのだが、その近藤石材店は小川さんの蓮寶寺の檀家で、先頃亡くなったおかみさんのお葬式は小川さんがなさったという



のである。

だから、青梅の吉川英治記念館の近くで母がやっている「紅梅苑」のお菓子も、

時々、近藤さんからお裾分けにあずかっています

と、小川さんは破顔する。

なにやら因縁話めいてきて恐縮だが、まさに、めぐりめぐって……という感じである。近藤さんのおかみさんの愛想のいい顔を思い出しながら、縁というものの不思議さをつくづく思うのだった。

その小川さんの執筆依頼なのだが、私が予想していたような一回限りの随筆ではなく、連載だという。

「浄土」のような宗門の雑誌に、法然上人どころか宗教にはまったく門外漢である私の随筆の連載など、そぐわないだけでなく、読者の不興を買うかも知れぬと内心躊躇はするのだが、反面、目の前のお二人との縁に、何かとても逃れられない定めのようなものを感じてしまう。

タイトルはどうしますか

はつきりとした返事を、言い淀んでいる私的心を見透かしたように、小川さんは先へ進む。以前「ミセス」に連載した時のタイトルは、
「歩きながら」だった。いいタイトルを考えあぐねていた私に、小川さんがつけてくれたタイトルだった。

いいじゃないですか、まだお若いんだし、

歩きながら、見たものの聞いたもの、何でも自由にお書きなさい

その時の小川さんの言葉が、耳に甦った。

(まだ、お若いんだし……)

本当にそうだった。あれは三十台の半ばだった。

だが、今はもう五十五である。

「まだ歩きながら」「まだまだ歩きながら……どこかで見たようなタイトルだ。

「立ち止まって」……駄目だ、これじゃまずい。

いろいろ考えた挙句、「午後の光」というのが頭に浮かんだ。

五十五歳……一日に例えれば、もう昼は回ったが、まだ黄昏にはちよつと間がある……そんな年ごろだろう。

「午後の光の中で」……ちよつときれいすぎるな。「午後の日溜りで」……いかん、背中を丸めて日向ぼっこしているイメージだ。

「午後の日差しの中で」……うん、悪くない。

思えば、歩きながら、きよろきよろと周りを見回していたころから二十年、流されるように生きてきてしまった。その間、見たもの、聞いたもの、めぐりあった人々は、確実に二十年分増えているのだが、非才の悲しさ、それを糧として内に蓄えることはできていない。

だが、今更それを悔やんでも仕方がない。見たもの、聞いたもの、感じたことを歳相応に料理して、勝手気ままに綴ってみよう。

おととい替えたばかりの、老眼鏡のレンズを拭きながら、そう思った。

(作家)

テレビキャスターのアンゲル

⑤

視聴率という怪物

利根川 裕

(テレビ朝日系キャスター・作家)

テレビ業界には、視聴率というものが
ついて回っている。

テレビ業界にとっては、鬼より怖い視
聴率である。

わたしが毎夜テレビ局へ行って（わた
しが司会している番組は深夜近いから、

局へ入るのは夜の十時だが）、まず行なう
のは、前日のわが番組の視聴率点検で
ある。一分刻みに数字がずらりと並んで
いる。それをかなり丹念に見ることにな
る。

あるときは実験的に、前日の番組のV

TRに、この一分刻みの視聴率をうちこんでみたことがある。こうすると、一時間番組のうちで、どこで視聴率が上がり、どこで視聴率が下がったかが、一目瞭然となる。

そこで、反省会としては、なぜここで視聴率が上がり、なぜここで視聴率が下がったかを討論して、それをまた今日の番組の作りかたの材料にすることになる。

これはこれで、ある有効性をもった反省資料になることは事実だが、じつは話はそう単純にはいかない。なぜなら、仮りにわが番組の視聴率が上がった数分間は、わが番組の作りかたがよかったからとは限らず、その数分間の他社競合番組との関係をみなければならぬからである。

こちらの数字が上がっている数分間は、ライバル他社数局の数字が下がっているわけで、これを点検し直すのは、たいへんな労力がある。とてもそこまでは手が回りがねるのが実情である。

何はともあれ、テレビ業界内部では、それくらい神経をとがらせている視聴率である。

視聴率というのは、端的に言えば営業成績、売上げ成績である。その成績はただちにスポンサーの判断に反映する。単純化していえば、スポンサー側の論理としては、営業成績の悪い番組に莫大な投資をするわけにはいかないのである。

コマーシャルを提供しているスポンサー側からいえば、より視聴率の高い番組

にコマーションルを出すほうが利益に適うのは当然のことである。

ところで、いったい視聴率って、そんなに権威力のある正確無比な数字なのだろうか。

現実の話として、いま視聴率調査を行なっているのは、ビデオ・リサーチという会社とニールセンという会社である。

この二社がそれぞれ独自の調査方法をとっているのである。それがどんな調査方法かは、じつはわからない。もし調査の仕組みがわかってしまえば、そこに人工的な働きかけをして、視聴率を人為的に操作するものが出てくるからである。

というわけで、その調査方法の実態はわからないが、とにかく、どこかの誰か

のところに、調査用モニターが仕掛けられていたのであろう。しかし、不思議といえは不思議な話だが、「うちでモニターを頼まれたことがある」と、いう人の話は聞いたことがない。テレビがはじまって以来数十年もたっているのだから、その間にモニターを依頼された人の数はかなりのものになるはずなのに、そういう話をする人には、ついぞお目にかからない。

秘密が保たれなければ成立しない調査ではあるが、「じつは五年前に、うちが視聴率調査のモニターを頼まれたことがあってねえ」くらいの話が出てくるほうが自然ではないか。それが、どこからも聞こえてこないのは、むしろミステリアスなことともいえよう。

それはともかく、視聴率というのは、なるほど視聴者の数量を反映するものであるが、そのとき視聴者が居眠りしていたかも知れないし、ニガニガしい番組だと腹を立てていたかも知れないが、要するにそういう視聴の質は反映されていないのである。

アメリカでは、番組の質を調査する視聴率調査方法が開発されているとか。しかしまだまだ、とても実用化されないようである。

いま日本で行なわれている調査方法も、実情に合わなくなっている、という意見を聞くことがある。というのは、いまの調査モニターは、世帯単位で委嘱しているらしいが。いまは一世帯に一台のテレ

ビ、という時代ではない。それぞれ自分の部屋にテレビを持っていて、オヤジの見るテレビとムスメの見るテレビは違っている。これでは世帯を対象にしての調査は意味をなさないはずである。また、聞くところによると、ビデオどりする番組もこの調査方法ではキャッチできないとか。ちかごろは、ほんとうに見たい番組は、タイマーをかけてビデオどりする人が多い。これが調査数字に反映されないとしたら、まったく意味をなさないことになるう。

視聴率の数字は、仮りに一パーセントであれば三十万の視聴者がいた、と解釈するらしい。一〇パーセントで三百万人である。ちかごろ人気のサッカーのＪリー

グ戦の実況は、二〇パーセント以上の視聴率をとる。ということは六百万人以上の人が見たということになる。

NHKの大晦日恒例の紅白歌合戦は、衰えたとはいえ、五〇パーセントくらいの数字をとる。一千五百万からの視聴者がいるわけである。

わたしは、自分でテレビ番組を司会しながら、いま数百万の人がこれを見ていると思つて、慄然とすることがある。

ところで数年前、関西の深夜のテレビ番組で、関西で圧倒的な人気のあるタレント司会者が、ギャグとして、「みなさん、これから一分間、NHKの教育テレビにチャンネルを合わせてみましょう」といったところ、なんとそのとき、まさ

しくNHK教育テレビの視聴率は、二パーセントだったか三パーセントだったかの数字を示したのである。しかもなんと、その深夜時間帯では、NHK教育テレビは放映していなかったのである。司会者の一言によつてチャンネルをそれに合わせた人は、映つてもいないテレビ画面を見たのである。

これはもともとはギャグであつた。が、そういうことが起こつたのである。ここにテレビの、いいようなない怖ろしさがある。司会者の一言で、たしかにチャンネルを切りかえる人たちが何十万人といるのである。しかもその人たちは見えもしないブラウン管にチャンネルを合わせたのである。

ぞつとするような話である。そしてテレビというのは、そういうマスコミ情報媒体なのである。

ところで、民主主義的大衆化社会になって、その大衆の意志を反映するものの一つが選挙である。そしてまた、その大衆の意志を表現するものの一つが、テレビの視聴率である、とわたしは、かねがね考えている。

テレビでは、視聴率となってその反応が数量化されるが、さきにも触れたように、その視聴者の質は、数量化されてこない。選挙も似たところがあるではないか。有権者の一票は、政治意識が高い一票か、低い一票かはわからない。なかには義理づくの一票や、情実にかられた一

票や、買収の一票もあろう。からかいの一票もあろうし、ふざけた一票もないではなかろう。が、とにかくそういう票が積み重なって一定の票数になれば、その候補者は当選する。テレビの視聴率も同様である。その中身の質はともかく、一定の数字をあげた番組が堂々とこの世をまかり通ってゆくのである。

「その国民の民度が、民度に応じた政治家を選ぶ」という。テレビも同様、「その国民の民度が、民度に応じたテレビ番組を選ぶ」のである。

選挙制度を変えてみると同時に、視聴率調査のシステムを変えてみれば、これまでとは違ったこの国の民意が現われてくるかもしれない。

現代の快僧

浄土宗 西光寺住職

古宇田亮順さん



下町のデイズニー

稲葉小太郎

近頃、仏教に対する風当たりが強い。『葬式

仏教』という批判はとうに聞き飽きるほどだし、

社会的な問題に対する対応の遅さ、土地や金銭

に執着する僧たちの醜態もしばしば話題に上る。

仏教は女性差別の宗教だ、と主張する声もある。

日本女子大学の島田裕巳助教授は『仏教は何を

してくれるのか』（講談社刊）のなかで、「いま

ある仏教には期待できない」「仏教を成仏させ

よ」とまで書いている。

では、日本の仏教は必要ないものなのだろう

か。仏教が生まれたインドから仏教が消えてし

まったように、日本仏教もこのまま衰退して消

えてしまうのだろうか。

いなば・こたろう ●一九六一年神奈川県生まれ。東京大学文学部印度哲学印
度文学専修課程卒業。祖父は福井県の日蓮宗妙海寺住職だった。著書に現代日
本の宗教事情を描いたルポ『コンビニエンス・マインド』（大蔵出版刊）がある。

その鍵を握っているのは、教団ではなくてひ
とりひとりの僧侶以外にない、とぼくは思う。

なぜならひとのこころを動かすのは、組織でも

なければ組織でもない。ひとりの人間の生の、

トータル（全人的）なありようだと思うから。

だからこの連載では宗派や地位、学歴や家柄

に関係なく、そのひとりの仏教を生きている

個性豊かなお坊さんに会ってみたい。そのお坊

さんとともに、仏教とは何なのか、現代におい

て仏教に何ができるか、考えてみたいと思う。

まず第一回目に登場していただくのは、墨田



区の浄土宗西光寺の住職、古宇田亮順さん。児童向けの教育教材「パネル・シアター」の開発者である。

紙芝居が動く

パンパン拍手をいたしましょう。

ねえねえ、どんなおはなしはじまるの？

ルビーのように美しい

しあわせつかむゆかいなはなし♪

軽快で親しみやすいメロディ。やわらかいけれど力強い声。古宇田亮順さんが歌う「パネル・シアター 開幕の歌」は、一度聴いただけで覚えてしまう印象的なものだ。歌だけではない。歌詞に合わせて、紙で作った花が咲く。きれいな鳥が飛ぶ。太陽が顔を出す。その色の鮮やか

さ、展開の妙に、思わず身を乗り出してしまふ。なにより演じている古宇田さんが丸い顔をさらに丸くして、ほんとうに楽しそうにしているの
で、こちらも子どもに戻ったような気分になっ
てくる。

パネル・シアターとは、ひと言でいえば、「動く紙芝居」だ。

「パネル」と呼ぶ毛羽立った白い布を舞台とし、「Pペーパー」と呼ぶ布で型取ったさまざまなキャラクターが動き回る。

紙芝居は動きがないし、人形劇は作るのが大変。テレビは演じる者と観衆の触れ合いがない。そこで考えついたのが、これなんです

と古宇田さん。もともとは子どもたちに仏教をやさしく説くために考案したものが、大人でも十二分に楽しめる。ふつうばくたちは、紙で

作った人形は動いたりしないものだと思っている。それが古宇田さんの手によって、目の前で向きを変えたり、数が増えたりする。まるで魔法のようだ。

その秘密は、糊も磁石も使わずに両面貼ることができる「不織布」という素材にある。この布地の発見によって誰でも、自分の好きな題材を、自由に、安く、作り演じることが可能になった。

さらに素晴らしいのは、そのライブ感覚だ。演ずる者の熱気が観衆に伝わって、その場に入りだされる雰囲気。今、ここで、何かが生まれているという感じは、テレビやビデオでは決して味わえないものだ。

このパネル・シアターの発明とその後の活動により、古宇田さんは一九八一年(昭和五十六)に全国青少年協議会の「正力松太郎賞 個人賞」

を受けている。

その後は仏教全宗派の布教研究会に引っぱりだこ。各地の保育講習会、キリスト教の講習会にも呼ばれた。国内だけではない。カンボジアを始め、タイ、マレーシア、ネパール、インド、スリランカなどを飛び回って、子どもたちの前でパネルを演じてきた。

現在は西光寺住職のかたわら、淑徳大学、文京女子大学でパネルに関するゼミの講師もつとめている。著作も十冊を越えた。

「体がいくつあっても足りません」という古宇田さんだが、しかし、ここに至るまでの道は、決して平坦なものではなかった。

二度の転身

古宇田亮順さんは昭和十二年、上野寛永寺の

末寺・林光院において住職古宇田亮宣さんの三男として生まれた。

小さいころは、あまりいい思い出はない。昭和十六年に太平洋戦争が開戦。古宇田さんも、戦争で死ぬのが一番幸せだと思っていた。そういう時代だったのだ。

家は上野の山。遊び仲間近所の寺の子ども二、三人しかいなかった。ただ、立正大学のボランティアの学生が訪ねてきて、紙芝居をやってくれたときの感動は、今も鮮明に記憶している。

林光院は天台宗の寺だったため、古宇田さんも幼いころから比叡山に登って修行を重ねた。ところが次第に、山の中の修行と社会生活とのギャップが気になり始めた。たしかに山に入ってしまったら修行も耐えられる。でも実社会では、生きていくうえでの悩みがつきまと

う。両者の段差をどう埋めるのか、つねに考えていた。

大正大学に入学後、仏教伝道の練習のために児童研究部に入る。子どもたちの前で人形劇を上演していて、彼らの熱心な眼差しに打たれた。

それまではひがんでいたというか、自分はつまらない人生を歩んでいくんだろうと思っていました。それなのに、こんな自分の話でも聞いてくれる相手がいるんだ、と知って感激したんです。

古宇田さんは、その道にのめり込んでいく。人形を携えて仲間と日本各地へ向かう。バスの終点からさらに自転車に乗って、伊豆半島の先端の村まで行ったこともある。

大学院を終えるとき、このまま学問に打ち込み仏教の道を進むべきか、それとも社会へ出ていくべきか悩んだ。父親とも何度も喧嘩したが、

結局、仏教を世の中にどう生かすかテストをする意味でも、いったん寺を出る道を選択した。

一回目の転身だ。

就職は神奈川県座間市の教育委員会。社会教育の分野で活動が始まる。仕事は順調に進み、二十六歳のときには早くも課長に昇進。社会教育主事の資格も取って、この小さな町を立派に育てることが夢だった。

ところがその直後、大学で後輩だった赤尾敬子さん（現在の夫人）と結婚し、彼女の父親が住職をしていた西光寺に入らないかという話が持ち上がった。

やっと資格も取ってみんなから喜ばれているときに、それを捨てなければいけない。ものすごく悩みましたよ。それほどまでして結婚しなくちやいけないのかってね。

しかも西光寺は浄土宗の寺。天台宗の家に生



まれた自分が継いでいいのか、という躊躇もあった。そのとき、増上寺の椎尾弁匡師に、教と仏教と両立できるはずだと説かれて、もう一度仏教の道へ戻ることを決心した。

二回目の転身である。

だが、寺に入ったからといって、おとなしくしている古宇田さんではない。たとえば「大蔵経」は、もっとやさしくしなければ子どもたちはわかるはずがない。自分がやってきた人形劇の腕を生かし、もっと手軽にできるパフォーマンスはないだろうか。そのための材料はないだろうか……。

機会があるたびに大きな文房具店や、布や紙の博物館を覗いていた。

そして一九七二年。たまたま入った東京の呉服屋さんで、不織布と出会う。本来はボウリン



グの靴下、幼稚園児の帽子に使っていた素材だった。

これは安いし、加工が簡単。さっそく人形作家の松田治仁さんとふたりで、ストーリーを考え、絵を描きました。作り出すと夢中になってしまつて、徹夜して七、八十本くらいのお話を一気に作りましたね。

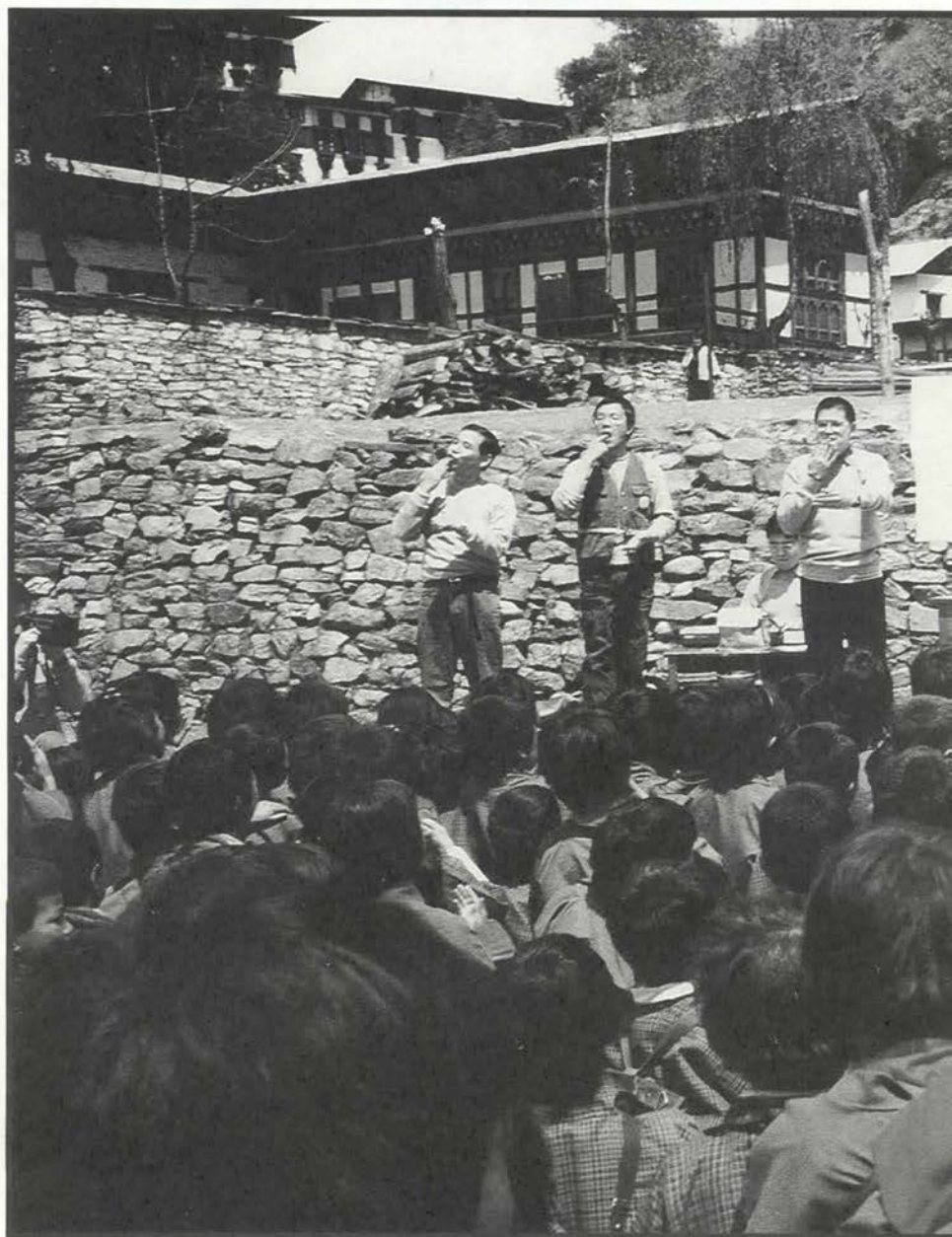
子どもたちの前で演じると、予想以上の反応が返ってきた。次第に親たちも集まるようになり、観衆は寺に入りきれないくらいに膨れ上がった。

その後は、すでに書いたとおりである。

こうして古宇田さんの歩みをたどっていると、つねに何かに悩んでいるひとだと気づく。しかも、その悩みはどれも半端ではない。

でもね、悩むたびに、何か新しいものが生





まれてくるんです。そのへんは有り難いな、
と思いますよ。

一度は離れた仏教の道へ、悩みつつも戻った
からこそ、仏教と社会との接点を見出す努力を
した。切り抜いた紙が片側しか付かない、裏返
しができない、と悩んだために、「Pペーパー」
に巡り会えた。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を演
じるとき、白い布ではどうしても地獄の雰囲気
がでない。そこから、黒いパネルを使い、蛍光
塗料で描いたキャラクターをブラック・ライト
で浮かび上がらせる手法を開発した。

かつてウォルト・ディズニーは、さまざまな
キャラクターが登場するアニメによって子ども
たちに楽しみを与えてくれた。古宇田さんが歩
いたテレビも電気もないアジアの国々で、パネ
ル・シアターはそれと同じくらいのインパクト
があったのではないか。

仏教とは文化なり

古宇田さんの活動は、現代における布教のひ
とつの形態と考えることができる。実際にパネ
ル・シアターを通じて檀家になったひとにもい
らしい。でも、ここでいう布教の意味は、とて
つもなく広い。

こちらの教えはいいものだから、押しつけ
るというのでは狭いと思う。浄土宗の教え
を知ったらこんなに楽しくなった、その楽
しみをみんなと分かちあえる、というのが
ほんとうの布教ではないでしょうか。

古宇田さんとしても、自分がパネル・シアタ
ーの権威になったり、技術を独占するつもりは
まったくない。実際今では、いろんな著者がパ
ネル・シアターの本を書くようになってい

かつては仏教からいろんな文化が生まれたように、パネル・シアターは仏教的なエッセンスを含んだ文化として広がりつつあるのだ。

仏教をやさしい表現で伝えるというのは、ひとつひとつの寺でやらなければいけないこと。みんながお寺でやったら、楽しいでしょうね。

パネル・シアターは現代の絵解き説法ですね、というと、

あれでパテント取るのがおかましいと思つたのはそこなんです。昔からあったものだし、お金もかからない。でも逆にいえば、ほんとうに自分の力を試される。やさしい部分と怖い部分があります。

例えば三歳児がたどたどしい言葉で今日のこときことを語っただけで、大人たちが涙を流すことがある。ある講習会では、腰の曲がった老人

が「兎と亀」を演じた姿に、会場全体がじーんと感じ入ってしまったこともある。

話がうまいとか絵が上手だということではなくて、そのひとが本来持っている良さが、出るかどうかのポイントなんです。パネル・シアターは、気取った人にはできません。演じる側の照れや奢りは、子どもというの

はすぐに見破ってしまいますから。

現代はテクノロジーの時代である。子どもたちは物心ついたところからテレビを友だちとし、コンピュータに親しんでいる。そんな時代だからこそ、パネル・シアターの持つ意味は大きいと思う。

演じる者と観客との息づかいの交換まで含んだ、五感を総動員した関係。こうしたトータルな関係性のなかでしか、伝わらないものがある。仏教とは、まさにそういうものではないだろうか。

『いのちを看取る』

D・E・S 臨死問題研究会編



近年、「死」の問題に対する人々の関心が高まっている。安楽死、尊厳死、脳死、臓器移植、延命治療、終末期医療、看取り、ホスピス、そして臨死……、聞き慣れなかった言葉もいまやポピュラーになり、それぞれにさまざまな研究会も行なわれている。「死」を考えることは、「いのち」を考えることであり、それは「いかに生きるか」ということにもつながっていく。

この書は、そうしたことに問題意識をもった浄土宗の僧侶有志五人が、一九八四年に会を発足、これまでの九年間にわたって医療、看護、宗教関係者を中心に、講師を招いて開いてきた月例会などの抄録を中心に編集したものだ。D・E・SとはDeath Education Societyの頭文字からの命名。

一部から四部に分かれていて、一部には「わたしにとっての死」「いのちとは——臓器移植を体験した一僧侶の叫び」「生きにくくなつた子どもの世界」、二部は「人間の生命のはじまり——人為的介入の是非」「生死観そして死生観——告知とケアをめぐる」「老いは四方からやってくる」、三部は「病む人のかかわり」「老いと死の看取りのなかで」「末期看護のあり方——ひとりひとりのいのち」「臨

死患者の願望——死を待つ心の共感をとおして」、四部は「いのちの余韻を看取る——植物状態の家族との体験から」「看護と宗教のかかわり——看取りと宗教、私の場合」となっている。いずれもその世界の専門家が自らの体験をとおした話となっていて、特に一部の「わたしにとっての死」においては、アナウンサーの小林完吾氏がダウン症候群の愛息を亡くしたことについての話は、考えさせられる。

この表題を見てもわかるように、その抄録の抜がりは、同会会長の藤本雅清師が「そのままが私たちの問題意識の変遷」と言うように、終末期医療、看取りといった問題から、さまざまな「いのち」へと広がっていて、読む者に「いのち」を考えさせてくれる。

生き生きる



僧多聞

「私は現在、お陰でなんの不満もないし、不幸でもない。だから、私には宗教は必要ないのだ」という大学教授に出会ってしまった。

なにもことさら大学教授などことわることもないのだが、悪かったが、思わずまじまじとその人の顔を見てしまったほど、その肩書が記

憶深かったのだ。

もちろん、言うまでもなく宗教は不満や不幸をかかえている者だけのためにあるものではない。

宗教は「生きる」ための教えなのだ。

いや、「生き生きる」といったほうが、よりた

しかなものになる。

人生をいかに生き生きと「生ききる」ことができるかを教えているのが、宗教だ。

その昔、世情を諷刺したものに『浮世床』という戯本ざげんがあったが、その中の一節に「論語読みの論語知らず、よりも、論語読まずの論語知らず、のほうが余程よい」とあった。

教授もたまには戯本など読まれるといい。

だが、教授を一方的に揶揄っているだけでは片手落ちになる。

お経を死者の供養のためのもつとすっかり思いこませてしまったのは、お坊さんたちの営業根性の行き過ぎからで、もちろん、お経はそんな陰気臭いものではない。

「極楽を保証されても娑婆がいい」

これは仏教詩人、相田みつをさんの言葉だが、これこそお経の真髄である、などといったらお

坊さん仲間に睨まれそうだが、私はこの言葉は至言だと思っている。

「人間は生れたら必ず死ぬ」

これだけは例外はない。

だからといって、人間は死ぬまでのために生きていてのではない。

生ききるために生きているのだ。

「生ききる」これは大切な言葉だ。

「生ききる」というのは、単に天寿をまっとうするということではない。

子供は子供なりに、大人は大人として、その時を懸命にいきいきと生ききるということだ。

「宗教はなんのためにあるのですか」

と問う人に、

「いきいきと生ききるためさ」

というと、その人は意外なことを耳にしたような顔になり、



「ホー、私はまた安心して死ぬることを教えているものかと思っていました」

という。

これはちやうど、落語に出てくる耳の遠い爺さんが、

「おい、今、表を通って行ったのは、隣の源兵衛さんじゃなかったか」

という、これもまた耳の遠いお婆さんが、

「違いますよお爺さん、あれはお隣の源兵衛さんですよ」

という話そのままで。

つまり、いきいきと生きるといふことは、安心して死ぬことを教えていることなのだ。

「光陰矢の如し」という言葉がある。

まったく、うかうか生きている時の流れは、疾風のように速い。

振り返って、過ぎ去って行った自分をみると、

慙愧の残骸がむごたしくころがっているのに、ガツクリくる。

そうした思いを性懲りなく毎年繰り返している愚かさ。まったく情けない。

白隠禪師の師である慧端和尚の教えに、「一日暮らし」というのがある。

これは、行き当たりばったりの「その日暮らし」のことではない。

慧端和尚の教える一日は、その一日が欠けてしまつたら、自分の一生を失ってしまうほど貴重で大切な一日なのである。

自分の人生にとって、それほど大切な一日を空しく過ごすということは、自分がこの世に生まれ出て来たことを、無駄にしようと努力をしているようなものだ、という訳だ。

またたりぬ おどりとどつてあの世まで

これは、六代目菊五郎の辞世の句だが、ハッと

目の覚める思いがするではないか。

菊五郎がいかにも一日を大切に暮らしていたかがわかる。

これを「一日暮らし」というのだ。

そして、これこそ「生ききる」ということだろう。

生ききる一つの生き方として「行雲流水」という心がまえがある。

これは「こううん、りゆうすい」と読むのだが、「行く雲のごとく、流れる水のように」と言う意味だ。

つまり、なにごとにもとらわれることなく悠悠と無心に生きることだ。

時に雲は山頂にかかり、その山の姿を美しく見せることもあるが、たちまちそんなことも忘れてどこへともなく過ぎ去って行く。

水もまた同じである。

必要とあれば、方円の器に従って精一杯に生

きてみせるが、もとの返れば、たちまち本来の姿に戻って流れ去る。

それに比べて人間はどうだ。

「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」などと、なんとも未練がましい。

人は死にのぞんで、多くの者は「残念」というそうだ。

つまり、生ききっていない証拠だ。

生ききった者なら、きつと「雲水」の如く、「無念」であるだろう。

水のように——と言えば、水ほど日常生活の中で、その折々に生ききる教訓を見せてくれるものは他にない。

水は、己れに接するすべてのものに潤いを与え、あらゆるものを育んでいるが、水はそれを少しも思きせがましく振舞うようなことはない。

いや、そのようなことを考えたことすらないだろう。

そして、水はそのまじわりにおいて渾然一体となり、世界を一つに結ぶ。

道歌に——雨、あられ、雪や氷とへだつれど、とくればおなじ谷川の水——とある。

仏の教えというものも、そういうものののだ。「仏教を一言でいったら、どういうことですか」と問うた者がいる。

賢者がそれに答え、

「悪をなさず、善を行なう、ということだ」

と言った。問うた者は、そのあまりにも常識な

答えに拍子ぬけして、

「なんだ、そんなことだったのですか」

というと、賢者は、

「三歳の童児でも知っていることを実行できない大人が多いのは、どういう訳かね」

と問い返したという。

とかく宗教の話というと、妙にまわりくどく理屈っぽい。

人によると、わざわざそういう説明のしかたをしないと、納得してくれないからおかしな話だ。

「理も高ずれば非の一倍」

という諺がある。

理屈も行き過ぎると、かえって非理（道理にはずれたこと）よりも始末が悪いということだ。

本来宗教の教えというものは簡明直載（かんめいちょくさい、かんめいちょくさい）（わかりやすく、すぐ実行のできるもの）であらねばならぬはずだ。

どんなに素晴らしい内容をもっていたとしても、難解で聞いているだけで頭が痛くなるようなものでは「無用の長物」「猫に小判」「豚に真珠」と言うではないか。

理屈なく、スツと日常生活の中に溶けこんでこないような宗教など、骨董品を並べて悦に入つてゐるようなものだ。

自己満足だけでは慰みものに過ぎない。

我々はもちろん、慰みに生きているのではない。

正受和尚が、

「一大事と申すは、今日ただ今の心なり」

と教えているが、我々にとって、今日という一日が一大事なのだ。

それが証拠に、今日という日は生涯に二度ない。

「明日があるさ」

という。

なるほど、夜が明ければ明日がやってくる。

だが、その明日は昨日の今日ではない。

映画評論家の淀川長治さんがこう言っている。

今日は平成六年一月一日

一日は一年に十二回ある

今日は一月一日

一年に一回しかない

平成六年一月一日

あとにも先にも

私の一生の中で

地球の歴史の中で

今日一日しかない日

だから今日も

ニコニコしよう。

これだッ!

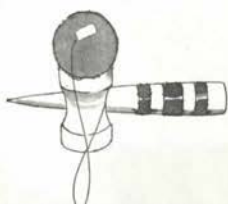
だから今日も

ニコニコしよう

これが、今日を生きるといふことなのだ。

宗教とは、今日もニコニコと生きるとするためにあるのである。

(日蓮宗弘法寺住職・南無の会事務局長)



●新年あけましておめでとうござい
す。今月号から「浄土」のロゴが、中
村門主のご染筆に変わりました。また、
巻頭エッセーを増上寺藤堂法主で飾る
ことができました。いずれも超多忙の
中での執筆です。雑誌を編集する身
にとつて、これはど光栄なことではあ
りません。改めて、ありがたく厚くお礼
を申しあげたいと思います。

●前後六回に及んだ須藤隆仙師「念仏
信仰の系譜」インド篇が今月をもって
終了いたしました。毎月、北海道から
ご送稿くださった須藤師にも、お礼を
申しあげたいと思います。遠からず統
篇の掲載も始まろうかと、今から楽し
みにしております。

●新連載の吉川英明氏は国民的大作家
吉川英治氏の次男です。大学卒業後、
すぐにNHKの放送記者として活躍さ
れ、その後、東京の世田谷や赤坂で書
店を経営されたりもしましたが、昨年
は講談社から小説を出版したりと、着
着文筆家としての地歩も固められつつ
あります。吉川氏には「浄土」誌上で
気楽に腕をふるってください、と申し
あげてあります。

●稲葉小太郎氏のルポルタージュも始
まりました。現代の快僧を順次訪問し
て誌上を賑わすに違いありません。ご
期待ください。

●日蓮宗弘法寺住職酒井日慈上人から
巻末エッセーが寄せられました。誌上

では僧・多聞としてありますが、いわ
ば宗門外の酒井上人の文章もありがた
いことでした。ぜひご一読をお願いし
たいと思います。

●十一月の半ばに機会があつて、北海
道の釧路から網走、旭川、小樽へ旅に
出ました。幸い雪にも遭わず、北の国
にしては比較的暖かい日だったので、あ
まり北海道の旅という実感はなかった
のですが、それでもオホーツクの海や
層雲峡の景観にはすっかり圧倒されて
帰ってきました。帰るなり、どこが一
番印象に残ったかと訊かれるので、私
は網走から北見へ抜ける国道沿いにあ
つた二個の土饅頭が忘れられない、と
答えたのですが、それは大正時代に道
路作りの強制作業にかり出され、労働
の苛酷さと寒さのために亡くなった網
走監獄囚たちの墓だったのです。聞け
ば、道路改修工事の折に発掘された彼
ら無名囚の遺骨を、一人の尼僧の奔走
によって葬った場所であるということ
でした。

(編集チーフ・小川有順)
編集スタッフ

栗田順一
齋藤晃道
細田芳光
大室照道
太田正孝
長谷川岱潤
村田洋一
石上俊教

浄土

六十巻 一月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成五年十二月二十五日

発行 平成六年一月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷

写真植字 文化フォントタイプ

〒〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七七八六九四七

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一〇
部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問
い合わせください。頒価その他について
詳しくご説明しあげます。なお、四月
号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受けつけ
ております。ただし、採否に関しては編
集部に一任ください。また、原稿は原
則として返却いたしませんので、必要
方は必ずコピーをお取りの上お送りく
ださい。なお、採用させていただいた分
は規定の稿料を進呈いたします。そのほ
か、ご意見、ご希望がありますらご遠
慮なくお寄せください。特に締切日は設
けておりません。編集部



SAPPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

すっきりが、いい。 新しいローレルと、日本。



頒価五百円

Photo:ローレル25ツインカム1600cc(オプション装着車)

松方は、**㊦**りゃあいいと思った。

㊦本木は、**㊦**るほどと感心した。

㊦方・**㊦**木の**㊦**ローレル評判記。LAUREL誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。 本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル 25 ツインカム1600cc 全長4710×全幅1720×全高1380(mm) 主な装備●R25D1E(6気筒ツインカム-総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS(6400rpm)(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●インナーフアールエアフロ●ローレルサウンドシステム(※NET値)とは、エンジンに準拠した状態とはば同等条件で測定したもので、●11年度自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323・札幌Tel.(011)722-8823・名古屋Tel.(052)951-8823・大阪Tel.(06)536-1123・福岡Tel.(092)451-8823 ●お近くのローレル販売会社へ